

龍ヶ崎

「西の風物語」

(旧市街西部地区・名所旧跡調査)



龍ヶ崎西コミュニティ協議会文化体育委員会

はじめに

龍ヶ崎西コミュニティ協議会
会 長 海老原 劭

私たちの龍ヶ崎西小学校区は、龍ヶ崎駅を起点に商店街が立ち並び、その周辺に住宅地が広がっており、歴史や文化を継承した祭りや行事などが行われています。

このような中、以前は当たり前だった地域のつながりが希薄になりつつあると共に、少子高齢化の進展に伴う課題や、安全・安心な暮らしに関する課題などがあり、その対応が求められています。

そこで、区や町内会が中心となり龍ヶ崎西小学校区に居住する住民相互のつながりを深め、コミュニティセンター活動推進協議会など地域で活動する各種団体がお互いの情報や地域の課題を共有しながら、連携・協力し地域課題の解決に取り組む組織として、平成二十五年4月に龍ヶ崎西コミュニティ協議会が発足しました。

当協議会には、5つの各委員会（文化体育、広報、地域福祉、生活安全、環境美化）を設け、それぞれ活動を開始したところですが、各委員会共に、コミュニティ活動を通して地域の皆さまと信頼関係を深めご理解とご支援を頂き、活動の源であるニーズを頂戴し、更なる飛躍を目指して頑張っております。

活動内容も防災訓練、高齢者視察研修、花植えによる美化活動、RYUとぴあ音頭パレードへの参加、ウォークラリーの企画、西の風まつりなど、いずれも社会背景に呼応した行動的なものでありますので、地域の皆さまの記憶に残っているかと思います。

本冊子は、文化体育委員会の中で地域の名所旧跡を洗い直し、記録に残そうと活動を開始したものであり、地道に足でまとめ上げたものです。名所旧跡の中でも輝き続けているもの、置き去りにされているものとそれぞれありますが、龍ヶ崎における節目の時代に社会的な役割を果たしてきた由緒ある名所旧跡で、無病息災、五穀豊穡、商売繁盛などの信仰の場となっています。このような心のよりどころを求める国民性は、いつの時代も変わらないと感じております。

この度の貴重な体験と共に、後世に残すことになれば良いと思いますが、出来た本冊子をご家庭で龍ヶ崎の歴史の一端に触れる機会にご利用いただけたら幸いです。

ご挨拶

龍ヶ崎西コミュニティ協議会
文化体育委員長 若生 悦男

当委員会の事業の柱として、地域社会に役立つ身近なものは何かを求めていた時に一昨年若柴町を歩いていると、誰も分からないような神社や仏閣、祠などを分かり易く銘板として明記されているのを拝見しました。龍ヶ崎西小学校区にも多くの史跡があるので、「今、この地区の歴史を分かる世代で、子供達や他地区から来られた人たちに伝えて行こう。」との思いで今回の委員会事業の1つとして取り上げようと提案し取り組む運びとなりました。

まず、当委員会では歴史民俗資料館による出前講座を利用して身近な龍ヶ崎の歴史と調査方法を学び、奥深さや難しさを肌で感じました。それから、委員メンバーでそれぞれに地区分けし、調査場所の写真などを地図に記し、近所の方々やお寺の住職、神社の宮司などのご協力を得て調査をしました。

その結果、調査箇所を地域の時代背景の濃い場所24箇所に絞り込んで調べて行こうということにしました。

各箇所における編集作業は、それぞれの委員メンバーが何度も何度も調査箇所へ足を運んで調べたものを編集担当委員が取りまとめたところ冊子として地域全戸に配布することができるようになりました。さらに、今回紹介する箇所については、名称を木の板へ彫刻刀で彫り込んだものを各箇所へ銘板として設置し、その場所がわかるようにしました。

龍ヶ崎「西の風物語」が充実した内容のものに仕上がったのは、地域の方々のご協力があったからと感謝しております。冊子を読んでいただいた方が、地域の歴史に触れて、掲載した史跡などを訪ねてみると直に歴史を感じることができると思います。

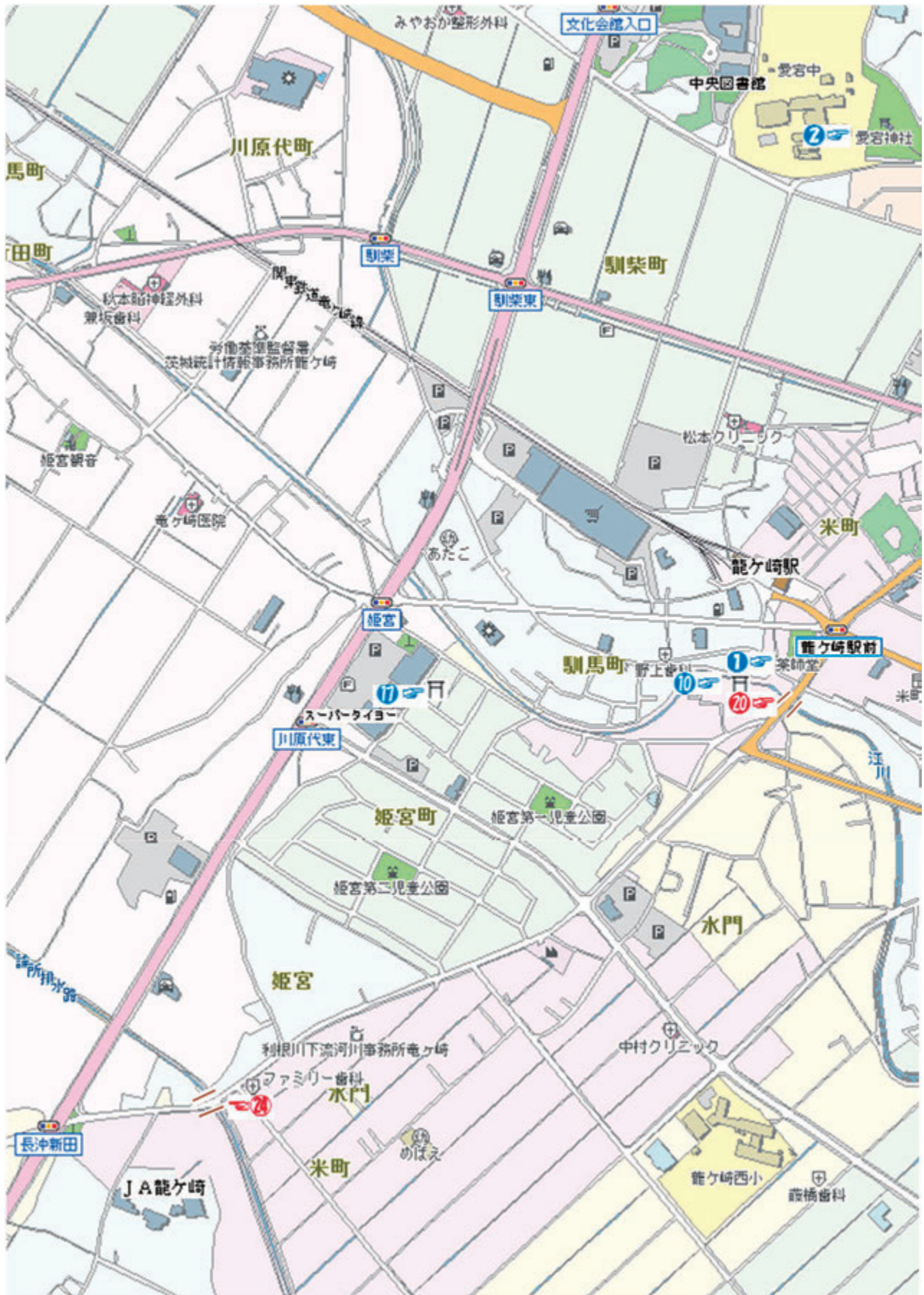
最後にご協力いただいた関係者さまには、大変厚く御礼申し上げます。

目 次

地図 1	----- 1 ページ
地図 2	----- 2 ページ
① 米薬師堂（こめやくしどう）	----- 3 ページ
② 愛宕神社（あたごじんじゃ）	----- 4 ページ
③ 般若院（はんにゃいん）	----- 5 ページ
④ 大統寺（だいとうじ）	----- 6 ページ
⑤ 八坂神社（やさかじんじゃ）	----- 7 ページ
⑥ 頼政神社（よりまさじんじゃ）	----- 8 ページ
⑦ 高田権現神社（たかだごんげんじんじゃ）	----- 9 ページ
⑧ 並木道祖神（なみきどうそじん）	----- 10 ページ
⑨ 本願寺不動堂（ほんがんじふどうどう）	----- 11.12 ページ
⑩ 水門水神宮（みずもんすいじんぐう）	----- 13 ページ
⑪ 土地改良記念碑（とちかいりょうきねんひ）	----- 14 ページ
⑫ 別雷神社（べつらいじんじゃ）	----- 15.16 ページ
⑬ 直鮒大師（すうぶなだいし）	----- 17 ページ
⑭ 三笠宮来龍碑（みかさのみやらいりゅうひ）	----- 18 ページ
⑮ 竹駒稻荷神社（たけこまいなりじんじゃ）	----- 18 ページ
⑯ 花光大師（はなみつだいし）	----- 19 ページ
⑰ 姫宮稻荷神社（ひめみやいなりじんじゃ）	----- 20 ページ
⑱ しぶくり卵塔（しぶくりらんとう）	----- 21 ページ
⑲ 高砂橋（たかすなばし）	----- 21 ページ
⑳ 松濤橋（しょうとうばし）	----- 22 ページ
㉑ 大正橋跡地（たいしょうばしあとち）	----- 22 ページ
㉒ 伊勢屋橋（いせやばし）	----- 23 ページ
㉓ 昭和橋跡地（しょうわばしあとち）	----- 23 ページ
㉔ 論処橋（ろんしょばし）	----- 24 ページ
㉕ その他の旧跡・史跡・祠（写真資料）	----- 25.26 ページ
㉖ 委員会活動の様子	----- 26 ページ
参考文献及び資料・協力者一覧	----- 27 ページ
編集後記	

※⑲～㉔は橋の名所を表す

地図 1



地図 2



- ・掲載地図は茨城県が公開しているもので、掲載・追加加工の承諾を得たものです。
- ・地図並びに本文中の龍ヶ崎の「ヶ」の表記は全て大きな「ヶ」に統一しました。



① 米薬師堂



米町の薬師堂（瑠璃堂）は、もと新町にあった高森山本願寺の飛地にあり、天明六年正月の高森山本願寺亮観の記によると、本尊の薬師如来は行基（ぎょうき）の作で、加藤清正の守護仏であったという。清正の家臣であった浪人が剃髪し諸国修行の途中、慶長十年（1605）龍ヶ崎へ来てお堂を建てこれを安置したという。米三粒に霊水を含ませ、秘文を唱えと難病の娘が快癒したことから米の薬師様として信仰されていったという。

江戸時代、龍ヶ崎は仙台伊達藩の領地となり、伊達家は薬師如来の信者であったところから龍ヶ崎の東西の護りとして西の米町薬師堂、東の砂町薬師堂（医王院）を定め、米薬師堂は宝永元年（1704）造立され、以来多くの信者を集めた。

米町の薬師様は病気平癒、開運の薬師といわれ、地元女人講中が奉納した大きな絵馬のとおりに明治～昭和の時代までも隆盛を誇っていた。

11月の薬師市（いがっぺ市）は多くの人で賑わい、古くは芝居や見世物興行などがあり、会津、日光の辺りより塗り物商、栃木の麻屋、その他諸国より多くの商人が入り、米町、新町、上町の辻辺りまで両側残らず店（たな）がかかり、町人、農民たちの買物で群衆雑踏し、この地域では利根町布川の地藏市と並び大繁盛を極めたという。

内陣（堂内）には薬師如来、日光菩薩、月光菩薩の他に十二神将が置かれ、薬師如来は秘仏で厨子の中に安置されているが、十二神将は薬師市の日に拝観することができる。

境内にあるものとしては享保十年（1725）に建立された等身大の延命地藏尊がある。



堂内厨子

延命地藏尊は民衆を薬師瑠璃光如来に導く案内役で、参道の真ん中に参詣者を迎える形で座っているのが本来の位置とのことであるが現在参道わきで参道に向かって座っている。薬師堂そのものもこれまでに、場所の移動や向きの変更などで三回は動いている（住職談）とのこと、そのような中での移動があったものと思われる。かつては薬師堂が現龍ヶ崎駅の辺りに東を向いて町を見守る様に置かれていたという。その他本堂南側には江戸時代の住職のものと思われる卵塔（頭の丸い墓石）や舟形供養塔などが約20基程見られ、判読できる古いものでは寛永七年（1630）「権大僧都阿闍梨慶覚和尚位」と読める卵塔

も見られる。他にも江戸まで十三里などと刻まれた道標を兼ねた道祖神、屋根葺き替え・大修理・移転などを記録した4本の記念碑、薬師堂造立五年後の宝永六年（1709）に江戸神田鋳物師が奉納した擬宝珠（ぎぼうしゅ）（欄干の頭飾り）等々、歴史の証人としての事物が境内には多数見られる。ご住職は代々根町般若院が兼務されている。



② 愛宕神社



②

愛宕神社

関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は東軍で戦った伊達政宗に対して、京都圏内では近江国蒲生郡一万石を、江戸圏内では常陸国河内郡龍ヶ崎一万石を与え、以来龍ヶ崎は仙台藩の飛地となった。

伊達家は代々愛宕神社の崇神家であったので仙台にならって、火災から領民を守るため京都から火伏の神を迎え、領内西の丘陵地に愛宕神社を創建したものと思われる。愛宕神社は寛永十八年（1641）伊達藩二代目伊達忠宗の創建で、通称愛宕山と呼ばれる丘の東隅に鎮座する。愛宕山とはこの愛宕神社に因んだ命名であろう。

馴馬町からいたる道が龍ヶ崎の市街地に差し掛かるところに位置し、街を一望できる地点である。祭りは春（1月24日）と秋（10月24日）に根町の氏子が中心となり執り行われ、今も「火伏の笹」をもらう人で賑わう。



祭りの様子

社殿内部には愛宕神の本地仏である將軍地蔵の像が安置されている。現社殿は江戸の中期、元禄文化が華開いた次の年号宝永五年（1708）に再建され表六尺、奥行六尺五寸総檜造りである。昭和三十三年修築。本殿正面の鷹の彫刻は左甚五郎作の伝えが有り、雀や燕などの小鳥は神社の屋根には止まらないという。左甚五郎が活躍したとされる時代は江戸の初期であり、しかも架空の人物である可能性も高いためこの社伝はにわかに信じがたい。作は不明として、むしろ愛宕神の眷属（けんぞく）である鳶（とんび）を表したと見る説もある。鳶鷹論議は別にしても本殿左右と背面の壁面にある檼一枚板の浮彫りによる羽目板彫刻は、その大きさ、厚み、構図、人物描写のち密さ、物語内容ともに息をのむ素晴らしさであり、龍ヶ崎市民はぜひ一度じっくり鑑賞すべき傑作である。

江戸時代龍ヶ崎村には佐野氏という唯一人の神主が横町旧市役所跡地にあった屋敷に在住し、祭祀をおこなった。愛宕神社祭礼には愛宕山～根町の間に架かる「河内橋」と呼ばれた橋（佐野河内守から名をつけたという）で禊（みそぎ）を行い身を清めてから神社へ向かったとの記述が文献にあるが、橋の場所が特定できず委員会で資料調べや聞き取りを行っていた。「昔山の下に石塔があった」とのご近所の情報を得て、今般階段真下、江川支流に架かる橋わきの雑草中に埋もれている2つに折れた「史跡河内橋跡」と刻まれた石碑を発見し龍ヶ崎市歴史民俗資料館に口頭で報告した。2本並べて見える形に置くとともに場所が特定できた。

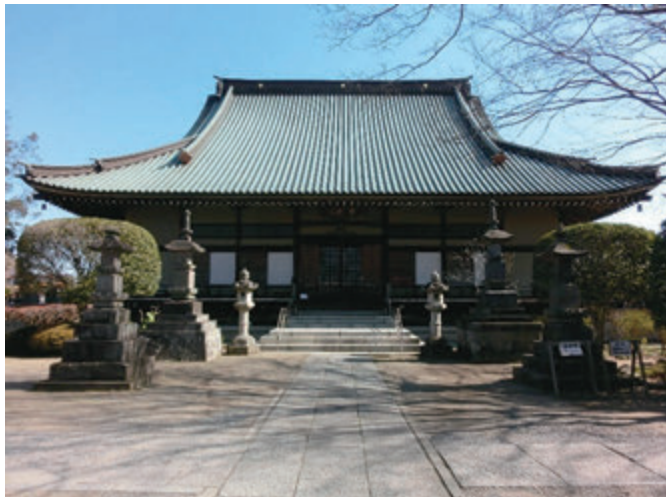


羽目板彫刻



河内橋跡碑

現社殿は平成二十年に「愛宕神社平成屋根銅板復旧工事」が施工され、その記録が写真付きで克明に報告されている。（現地由緒書有）



般若院



山号寺号を金剛山観仏寺といい本尊は聖観世音菩薩である。天元元年（978）鎌倉より常陸国へ来た道珍法印により貝原塚に創建され、大永四年（1524）小野逢善寺考観法印によって現在地に移り、領主土岐氏の祈願所となった。天正五年（1577）定雄法印は本堂、諸堂を整え中興一世となった。

江戸時代仙台領になってからは伊達家の位牌所として寺領三石をあたえられた。将軍家光の時、中興五世の朗月晃順法印は後水尾（ごみずのお）天皇の勅命で何度も法談をおこなったほどの学僧で、雨乞いにより江戸の大干ばつを救ったともいわれ幕府から「虎の尾」を拝領している。当地でも貯水池を作り、農地開発など勧農につとめた。現在も流通経済大学南側サッカー場隣に残る朗月（ろうげつ）池や、大学正面東側に広々と稲穂をたたえる光順田（こうじゅんだ）にその名を留めている。

かつては8月16日施餓鬼会の日般若院奉納相撲があり、ここで優勝すると関取になれるといわれ昭和の時代まで行なわれていた。

龍ヶ崎の鎮守である八坂神社はかつて今の般若院境内にあり、般若院が別当をつとめていた。いまでも例祭日に神官が供物を般若院にあげるしきたりがあり、寺の正面に御飯屋が建つのはこのような歴史によるものという。又、江戸時代愛宕神社の別当もつとめ、第五代伊達吉村（祖母の実家は龍ヶ崎）が来龍した際にも般若院住職が案内していることが伊達吉村著の紀行文「鹿嶋海道記」に記されている。

現本堂、講堂は昭和三十四年から4年の歳月をかけて建てられたもので、昭和三十八年に天台座主大僧正周湛猊下をお招きし落慶法要が営まれた。天台座主来龍の際には市内をオープンカーでおねり（いわゆるパレード）を行ったという。

本堂北側の樹齢およそ450年、樹高12mの枝垂桜（彼岸桜）は県指定の天然記念物で毎年春、市内外だけでなく県外からも多くの桜ファンが訪れ、観光客の目を楽しませている。

現ご住職は第二十四世・荒槇純眞師である。



冬の鐘つき堂



夏の山門



春の枝垂桜



4

大統寺



4

大統寺

天正十三年（1585）、豊臣秀吉天下統一の五年前、龍ヶ崎城主土岐胤倫（ときたねとも）は根町大文字台地の麓にあった臨済宗大運寺を現在地に移し、叔父であった下総国香取郡土室村（現千葉県成田市）祥鳳院の天岩梵宿和尚を招き、初代ご住職とした。その時に大聖院、天真院の二寺を合わせ寺名を大統寺、宗派を曹洞宗に改めた。

慶長十一年（1606）龍ヶ崎は仙台領となり、伊達家菩提を弔うことを約束し、寺領三石を賜った。寛文年間（1661～1672）に本堂再建、文化年間（1804～1817）に改修、山号を龍峰山とする。当寺には開山の土岐胤倫のほかに、仙台藩時代の代官や足軽、弓衆※が葬られている、本尊は釈迦牟尼佛である。

かつては、毎年夏の8月1日～13日まで13日間、付近の寺院の協力を得て托鉢が行なわれていた。現在は1日、7日、13日の3日間だけ夕方から街中を道路の両側に分かれて家並に沿って歩き、その際に街の人があちらこちらと家屋敷の戸口に出て浄財を喜捨する光景が見られる。先頭の僧侶が「大統寺」という文字の提灯を持ち、導師が錫杖（しゃくじょう）を持ち鈴を打ち鳴らしながら歩く。昔は草鞋（わらじ）であったが現在では白い地下足袋を履いている。これをお盆の托鉢（たくはつ）と言い、亡くなった人の供養と、世の中の平癒を祈願するために江戸時代から行なわれて来たという。遠くから近づいてくる托鉢の鈴の音は、昼間の炎熱地獄を生き延びホッとして夕涼みしている我々に一服の清涼剤を与えてくれているようで有難く、その托鉢姿は龍ヶ崎の一つの夏の風物詩ともなっている。

境内には不動堂、大師堂などがあり樹木では市指定天然記念物の竹柏（なぎ）が本堂わきにそびえ緑をそえている。ご住職は現在第二十八世に継がれている。

※弓衆：天和年間（1681～84）のころまで龍ヶ崎では足軽を弓衆（ゆみしゅう）あるいは御弓衆と称していた。いざ戦というときには先陣にかり出される訓練を受けた足軽で、普段は①御用飛脚の役②鉄砲弓槍の訓練③代官所警護、町の警戒をしていた。



大統禅寺



山号龍峰山



土岐胤倫の墓地



⑤ 八坂神社



文治年間（1185～1190）、源頼朝の家臣であった下河辺政義は常陸国最南部で河川敷の葦野原と沼地だった龍ヶ崎の開拓にあたった。開拓には高井（貝原塚）の農民たちを引き連れたので貝原塚八坂神社の分社を文治二年（1186）に高森（根町）へ建立したという。

御祭神は須佐之男命（スサノオノミコト）と奇稲田姫命（クシナダヒメノミコト）で、須佐之男命は疫病退散の神として非常に厚く信仰されている。神仏習合の時代に、祇園精舎の守護神である牛頭天王（ごずてんのう）と同一視されるようになったが、それは陰陽道との結びつきや、牛頭天王も疫神として崇められていた為と考えられている。

天正五年（1577）龍ヶ崎城主となった土岐胤倫（たねとも）は龍ヶ崎の第二次開発ともいべき開拓をさらに進めようとしたが、近隣に疫病（主に天然痘などで、当地方も大人、子供を問わず相当の死者が出ている）が流行し、死者が続出したので八坂神社の神霊を奉迎して、笛太鼓を鳴らして勇ましく祭事を行ったところたちまちに悪疫を消除し平癒した。そこで八坂神社を根町から町作りの中央であった現在の上町に遷宮し、祇園祭を行い、神に感謝することにしたという（茨城県神社誌）。おそらくこのころから撞舞（つくまい）の神事も行なわれたのであろう。撞舞は天正年間より始まったとの社伝がある。現在の中心市街地の町並み八ヶ町（根町・米町・新町・上町・下町・砂町・横町・田町）と並木堤防はそのころに整備されたとみられる。因みに天正末期の家数は約八百軒という記録が千葉県野田市図書館所蔵の「龍ヶ崎村名寄帳」に記されている。

明治維新まで八坂神社は天王社と呼ばれており、市民が八坂神社を天王様と呼ぶのはここからきている。明治政府による神仏分離令がでるまで日本の宗教は神仏習合（混合）で、八坂神社も江戸時代まで境内に龍星庵（のちに龍星院）という庵室を建て、その僧侶が別当となり天王社の管理に当たっていた。例祭の祭典は神仏混合で行われ、横町旧市役所跡地に住んでいた楠森稲荷社神主佐野河内守など佐野氏が代々禰宜（ねぎ）として別当とともに奉仕していた。

維新後八坂神社裏（南側）に明治十一年（1878）敷地2049坪の龍ヶ崎小学校が開校。大正十三年（1924）児童増のため仮校舎移転を経て、昭和十年（1935）根町の現在校地へ移転するまで約50年間、旧龍ヶ崎町の児童たちは上町校舎で学んでいた。



竣工なった拝殿内部

戦後宮司は椎名氏を経て昭和三十五年（1960）和歌森善郎氏となり、その後和歌森三海氏、そして平成二十六年現在和歌森将城宮司に継がれている。

神殿は永禄十一年（1568）創建されたが正徳五年（1715）火災で類焼、享保二十年（1735）再建された。拝殿は安永八年（1779）造立、安政三年（1856）台風で倒壊、文久元年（1861）再建された。平成二十六年拝殿幣殿大修繕竣工、本殿は市指定文化財



⑥ 頼政神社



⑥

頼政神社

龍ヶ崎の最初の開拓者である領主下河辺政義は一族の崇敬する源三位（さんみ）頼政を堤防内の中心にある場所へ祀った。これが新町北側に現在も残る頼政神社である。現在、地図上では横町の一角にあるがかつては新町に鎮座していたという。

源頼政は源平騒動の時代において以仁王（もちひとおう）の令旨に従って、源氏の長老として七十七歳にして平家打倒の挙兵を断行したが機熟さず、宇治平等院の合戦で戦死した武将である。その後の頼朝ら各地にいた源氏の決起を促したと言われている。また当代一流の歌人であり、伝説では二条天皇を悩ませた妖怪・鶴（ぬえ）を得意の弓で退治した人物でもある。治承四年（1180）の宇治平等院の合戦で戦死した際、その家来である下河辺清親（政義の兄）が頼政の依頼によりその首桶を持って戦線離脱し、そして龍ヶ崎に到りこの首を埋葬したのが頼政神社であるという。この伝説と同じものがあと2つあり、1つは古河市・頼政神社の社伝にも見られる。もう1つは千葉県印西市結緑寺という寺院にあり、やはり下河辺清親が首を埋葬し、自分は剃髪し僧になったという。

どれが真実かは別として、平家物語にも源平盛衰記にも頼政と息子仲綱の頸を下河辺氏と家臣が介錯して隠したことが書かれており、弟の下河辺政義が領主で居たところから、兄が弟の地を頼って来たとしても不思議ではない。真実は後世の歴史家に委ねるとして、頼政神社が下河辺一族の氏神として祀られ崇敬されていたことは事実であろう。一説によると頭髪を埋葬したとも言われている。

先に述べた歌人としての頼政であるが、父仲政も息子仲綱も勅撰集の歌人であり、頼政の歌は新古今和歌集などを含む十六の勅撰集に五十八首入集している。また多くの歌合にも参加し（右大臣兼実家歌合、俊成卿歌合、別雷社歌合等）歌人との交流も多方面にわたる。今回の文献調査での最大の発見は龍ヶ崎市史研究第3号で盛本昌広氏が寄稿した「下河辺氏と頼政」のP3で、下総守だった父仲政と若き日の頼政父子による東国下向の和歌

あまさかる 海上渦を見渡せば 霞に浮かぶ 信太の浮島 源頼政（夫木和歌集）

である。すなわち頼政は龍ヶ崎からほど近い浮島（現在の稲敷市浮島）まで平安時代に来て歌を詠んでいたということである。今まで小さな祠一つの頼政神社という認識しかなかったが、この事実は想像力をかきたて、頼政をより身近に感じさせた出来事であった。



明治初期にはりっぱな社殿があり、昭和期まで社や鳥居、木立があり歌を詠む人や、芸事をたしなむ人々なども多く参拝に訪れていたという。

龍ヶ崎の発展を800年以上も見つめてきた史跡でありながら現在、頼政神社の場所を探すのも苦労するような状態にあり、何とかもっと市民に知ってもらえる形に出来ないものであろうか。



7 高田権現神社



龍ヶ崎市役所南側道路からさらに南側に入る細い旧道にある現在地は、鎌倉時代この地の領主であった下河辺（しもこうべ）氏の一族小山氏の邸宅があった所で、この地一帯を小山（おやま）と言っていた（現在は小山住宅と呼ぶ）。もとは小山氏の邸内神として祀られていた。後の領主龍ヶ崎氏（下河辺氏の子孫は後に龍ヶ崎氏、又は龍崎氏と名乗っている）が永享の乱で滅び土岐氏が領主となった時、土岐氏はこの祠堂に熊野神社を遷祀し権現社と称し、当地方において将門調伏以来権威のある高田権現神社とした。

以来江戸時代をとおして明治維新まで老杉巨木が天にせまり、権現堂は五間に六間（10m×12m）の大伽藍であったが老朽化し、浮浪者の住家となっていたので整理し小祠を建て、講員により管理されてきた。昭和十六年戦争による物資、兵器輸送のために八間道路敷きとなり現在地（本宮は今より150m南）に移転した。その後老朽化したので講員一同の賛同を得て、社有財産の一部と募った浄財を合わせて、昭和五十三年10月大修復工事が落成し、盛大に御遷宮祭が執りおこなわれた。覆い屋根付き本殿の構造となっている。また境内には弘法大師堂も置かれ、札所石塔のとおり新四国八十八か所第59番の霊場にもなっていて「四郡大師」が春の巡拝で廻って来ている。1次2次調査で見落とししてしまったが、3次調査でこの大師堂の奥で木札を発見、残っている墨書きで「此宮享保五年十一月建立、天正五年壱月越宮…」まで読めた。この宮とは大師堂ではなく神社であろう。木札を書いた時の社殿は享保五年（1720）江戸中期の建立で、この地へは天正五年（1577）に来たとの表記であろうか。天正五年は本編⑤八坂神社にも記されている様に土岐氏が江戸崎より龍ヶ崎へ城主として来た年と符合する。旧江戸崎町には高田権現神社がある。10月1日の例祭日にはときどき稲敷市江戸崎にある高田神社（権現さん）まで講員で参詣に行くことがあるという。

高田権現神社にはかつて権現田という田圃があり、当宿になっている家はその田を耕して、その収入を祭りの費用に充てたという。この田圃は米町の薬師堂南西側にあったが現在埋め立てられ更地となっており、権現神社と彫られた小祠が一つ建っている。高田権現神社についてはこの様に講が活動しており、現在毎月講員費を徴収し社の補修費などに充てている。（現地由緒書あり）



札所石塔



木札



飛地の祠



⑧ 並木道祖神



⑧

並木道祖神

道祖神は道路の神どうろく神であって、村境や道路が二又の交叉路に祀られているものが多い。悪鬼邪類を除き止め、流行病などが町へ入るのを防ぐと言われる。道祖神の本体は神道では猿田彦命とされ、仏教では地蔵尊といっている。また二又を好むので大根やニンジンの二又のものを献ずる習慣がある。

米町並木道祖神の祭神は猿田彦命であり、天保六年（1835）7月この地に祀られた。古老の話では、歴代の地域の先輩たちが守り神として生活の中で、無病息災・家内安全・旅の安全、又は男女の神として祈念し、常に信仰してきたという。

昭和十一年地域有志の方々により改築され、第二次世界大戦の真つ只中の混乱時代にも心の安らぎの糧として信仰されてきた。戦後、国民みな食糧さえ無く生きるのに精一杯の辛い生活が続く中、風雨に侵された社をどうする術もなかった。その後国民の努力により経済大国となり、衣食住も整い国民一人一人の生活も安定してきた頃、誰言うことなく道祖神改築の呼び声があがり、講員一同の賛同を得て改築事業発足の運びとなった。講員一同の基金を加えて、趣旨に賛同された地域の方々の浄財を仰ぎ、昭和五十八年基礎土台工事、昭和五十九年二月落成した。

龍ヶ崎市内の史跡調査で道祖神の石塔は相当数見られたが、覆い屋根つきの厨子の中に安置されている道祖神は極めて珍しく、堅牢な聖堂となっている。この米町並木道祖神がいかにかこの地域で大切に扱われてきたかを顕著に示すものである。この地は昭和初期まで並木堤がまだ残っていて、その堤の上に道祖神の社が高くそびえていた事が写真に記録されており、本編⑫伊勢屋橋方面からもはっきり見えた。現在は道路面に近いところまで土堤が削られその上に少し盛土をして建てられている。（現地由緒書有）



昭和11年の改築記念碑



堅牢な聖堂



由緒書

⑨ 本願寺不動堂



商店街通り米町と新町の境より新町側にかけて、かつて高森山本願寺というお寺があった。しかし龍ヶ崎大火により本堂等焼失し、以来飛地境内である米薬師堂を代用していた。昭和五十三年11月9日、地域住民の浄財により、新町会館隣に本願寺不動堂が二間四面で新築落慶された。御堂下にはタイムカプセルとして当時の新聞、不動堂図面、おもちゃその他の品々を径10cmのパイプに入れ埋めたという。

堂内にある仏像としては、本尊の不動明王（座像）を中心に脇立として赤肌のせいたか童子、白肌のこんがら童子、そして高僧あるいは大師座像二体が左右に置かれている。



せいたか童子



不動明王



こんがら童子

さらに赤子を抱いた微笑みの弘法大師立像がある。この木彫弘法大師の台座には「子安弘法大師・香園寺」という寺名が彫られている。香園寺は愛媛県西条市にある四国八十八箇所霊場第六十一番札所の香園寺（こうおんじ）で子安大師の寺として有名であるところから、ここ不動堂内にいつの時代にか安産、子育て祈願としてほほ笑みの子安弘法大師が奉納されたものであろう。これらの仏像群が正面ガラス戸から拝観できる。これだけの仏像などが今なお残っているのは、おそらく大火の際に地域の人達が避難させ救ってくれたからではないかとのことである。



微笑みの子安弘法大師

境内にある他の建物としては、新町稲荷と呼ばれる小社（これについては本編P20「姫宮稲荷神社」で報告）、さらに六角堂と呼ばれる小堂がある。この六角堂は6つの部屋に仕切られており、その一室に極めて美男の弘法大師立像が奉納されており、市内在住の仏師に見ていただいたところ、大変よくできている木彫とのことである。



木彫弘法大師像

六角堂の軒は深い格子戸のみで、ホコリや強雨がそのまま入る状態にあり傷み始めているため地区の方に相談したところ近々ガラスを入れたいとのことであった。

また石造物としては、龍ヶ崎ではここ一か所のみではないか（歴史民俗資料館談）といわれている箱型双体地蔵（二体並びの地蔵）がある。双体地蔵の多くは石岡市、かすみがうら市、土浦市と限られた範囲に分布し、その他は取手市、つくば市、美浦村で数基が確認されている。なぜこの地に1つだけあるのかも謎である。ここ本願寺の双体地蔵はかなり風化がすすんでいて時代的にも古そうな様子である。



双体地蔵

その他、上部の風化で文字が読めないが下部に第二十番、第六十五番と読める2つの札所塔があり、ここも布川徳満寺「四郡大師」の札所になっており春4月に巡拝団が来たのを確認しているのでおそらく「新四国第〇〇番」と刻まれていたのではないかと推測される。

さて、かつてあった本願寺の正確な位置について当委員会も調べているが現在住宅地になっており難航している。寛永十二年（1635）に龍ヶ崎奉行今村惣兵衛が、並木堤の所有者である村長の諸岡長門に出した文書中に、「水門より馴馬堤境までの堤、同じく本願寺に植えた杉の次より大徳境までの堤に、松と杉を手抜きなく植えること。云々」という植林を勧める文書（師岡文夫氏所蔵）があり、この様な資料から表通りから並木堤近くまで境内の奥行があったであろうと推測できるが、さらなる古文書や古地図の発見が待たれる。本願寺住職は根町般若院が兼務されている。



二本の札所塔



六角堂を巡拝する「四郡大師」講



高僧座像



10 水門水神宮



高田神社の飛地である水門地区江川北側敷地を史跡調査中、対岸の水門塚本宅屋敷奥、江川側に高さ1.2mの社を発見、今は珍しい木端葺き（こばぶき又はこっばぶき：檜などの薄い板で葺いた屋根）の社殿で、瓦葺の囲い屋根がついている。水門地区の人達で昔から守ってきた水神様、稲荷様、天王様を合わせた社であることが判明。「水神講」として今も当番宿を毎年交代して活動しているとのこと。当番宿宅へ引き継がれている貴重な文書（主に講の取り決め、名簿、買い物などを記録したもの）が数冊あり、今般それをお借りできたので読ませていただき、その当時の地区の人々の様子が理解された。

講の正確な発足年は不明であるが（講員の曾祖父から昔聞いた話などからおそらく明治かそれ以前）大正十五年～平成二十五年まで約90年間の文書があり、大正末、昭和初、戦時、高度成長期、現在までの世相が垣間見られる。講の集まりは旧の1月20日と9月19日を基本として当番宿が日時を決め、昭和五十二年に姫宮会館ができるまでは原則当番の自宅での会食であったが、昭和五十三年から会館、または外食店での実施が多くなった。大正十五年に膳椀管理組合を作り、慶祝・不幸に使う共有食器を有料で貸し出したりして、この地区のコミュニティとしての役目を果たしていた模様である。この様な形態の講は市内各所で見られる。組合の家数は過去40～60軒が最大で、現在6軒である。当番宿へ引継ぐものはその他に水神祭と墨書きされたちょうちん、水神様、稲荷様、八坂（天王）様の箱宮である。

現社殿は平成四年再建されたもので、16名による遷宮式の板額がある。



こばぶき屋根



江川対岸からの社殿裏側



←ちょうちんと箱宮



11 土地改良記念碑



高砂の旧教職員住宅跡地に建っている「龍ヶ崎南部地区団体営区画整理事業」の記念碑で、碑文によると同事業は江川流域では最も早く昭和三十三年頃から計画され、昭和三十五年に県知事認可を受けた4か年継続事業で、東京オリンピックがあった昭和三十九年の春3月に竣工した水田面積204ha規模の事業であった。
先祖伝来の曲がりくねったあぜ道と自由な形の水田であったものを農業の近代化、機械化、大規模化にいち早く目覚め、江川流域他地区に先鞭をつけ事業に踏み切り、各地に区画整理事業を起こすきっかけとなった、と記されている

当委員会では下線部に注目し、これを証明すべく流域5か所にある土地改良記念碑を訪ねるとともに、水田耕作者からも各地区の様々な苦労話などを聞く機会を得た。

- ①川原代地区（川原代小学校前の碑）昭和三十七年11月事業着工、昭和三十九年竣工で210ha規模の事業。
- ②駒馬谷津地区（駒馬台地北側の谷津田北側坂下の碑）横田川、大正堀の源流地域であり一区画30aで67ha規模の事業。根水と台地からの流水が頼りであったものを昭和三十九年深井戸3か所を掘り、かんがい水を確保し、区画整理に着工、昭和四十年竣工した。現在深井戸は1本のみ稼働しているのを確認した。残りはニュータウンから流れてくる雨水で足りているという（ニュータウン開発の恩恵）。
- ③駒柴地区（来迎院下コンビニ北側の碑）昭和四十一年3月竣工で160ha規模の事業。
- ④大宮地区（大宮保育所前の碑）昭和四十一年11月着工、昭和四十七年3月完成、水田518ha、畑156haの事業であった。この地区は江戸時代より引水に苦労した地域で上流の川原代、駒馬、龍ヶ崎と何世紀にもわたって水論（水に関する争い）があった。この土地改良によって大正機場（大正堀）82kW、北河原機場（論所堀）139kWの揚水機が設置され、水の問題も解決された。
- ⑤佐貫地区（鶴舞揚水機場前の碑）昭和四十六年土地改良着工し31年間、平成十三年完成の一大事業で、江川の用水、排水分離工事（6.9km）と論所・用排水工事（5.7km）が並行して行われた。昭和五十四年に完成した揚水機140kw2台の巨大なモーターにより毎秒3.7m³（3.7トン）の揚水が可能になった。

結論として高砂地区の土地改良への取り組みは最も早かったことが確認された。したがって高砂地区にあるこの碑は単なる記念碑ではなく、この地区の農業を担ってきた人達の先見性とパイオニア精神、そして団結力を象徴する碑でもある。



①



④



⑤



12

別雷神社



高砂の通称雷神様の造りは大変珍しく、向って左側に別雷神社、右側に稲荷神社があり2社が共通の廻縁と1つの屋根で共存しており、さらに瓦葺きの覆い屋根で護られた構造となっている。境内にある昭和二年と昭和四十六年の2基の修繕記念碑にも別雷神社と稲荷神社が必ず2社併記されており、代々今の造りで建てられていたと想像される。



水神宮 金毘羅宮 道祖神

雷神様をいつこの場所に祀ったかは不明であるが、境内には多くの祠や御堂があり、古い時代のもものでは延享四年（1747）の道祖神、寛延四年（1751）の水神宮などが見られる。また新道を500m東へ行ったところにある高砂、直鮎地区の共同墓地にある古い墓石の年号を読むと、享保五年（1720）、元文七年（1742）のものがみられる。このことから推定すると江戸時代中期には高砂の人達の生活がこの雷神様地区を中心にあつたことが見て取れる。

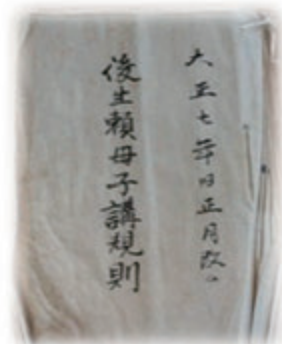
雷神様の本社は京都上賀茂神社（稲荷神社）で別雷神社（わけいかづちじんじゃ）が正式の名称である。昔は上町師岡家の氏神であったがその後高砂地区の鎮守となったという。別雷神社で毎年正月20日に行われていた祭りを「高砂おびしゃ」という。本来おびしゃは正月に徒歩で弓を射り、その結果で一年の豊凶を占う神事であるが現在は行っていない。正月20日に八坂神社に御礼を受けに行き、それを氏子各家庭に配布することは行われている。



八幡宮 弘法大師堂

旧暦の9月19日には「氏神祭り」があり、これは現在も受け継がれている。

高砂の飯沼地区には9畝（せ）18歩（ぶ）の雷神様免田（規定の年貢が免除されていた田んぼ）が今でもあり、その収穫収入で祭りや神社の補修をまかなって来たという。この免田には「後生田」という名称があり、その管理のために「後生頼母子講（ごしょうたのもしこう）」という講が代々存続してきた。今回の調査で、その規約及び名簿を記した古文書が高砂会館の中に保管されていることを知り、管理されている金沢光男氏の立会いのもと写真に撮らせて頂いた。文箱に入った大正七年より新しい時代のもので、それよりも古いものは確認できなかった。大正七年、十三年、昭和三十六年、五十四年、平成四年に規約改正があり、聴き取りによると平成二十七年から秋の氏神祭りは旧暦9月19日ではなく、勤め人が多くなってきたため新暦11月の第一日曜日に変更することを氏子21名で決めたという。



— 15 —

古来「頼母子講」は西日本で使われた名称で、東日本では「無尽（むじん）講」と呼ばれていた。「無尽講」は一般に集落の10～20人程度で出資し合い、抽選や入札で借りられる仕組みの相互扶助金融である。古文書には金融関係の記述は見られなかったが、もしかすると地域の親睦を目的とした講であった可能性もある。因みに無尽という言葉は昭和の時代まで使われていた様で、昭和二年の修繕記念碑裏の寄付者名の中に、五十銀行（後の常陽銀行）龍ヶ崎支店の他に常盤無尽（後の東日本銀行）支店の名が見られる。



春の大師巡拝

その他市内では珍しく、会館内に仏像が複数体安置され、春の大師巡拝時は会館内で地元の人達が御接待をし般若心経が読経されるのを確認することが出来た。また境内にある念仏講、二十三夜講、子育て観音の祠や大師堂、八幡宮の存在より、ここが昔から地域交流センターとして機能してきたであろうことが容易に想像できた。また、今は無くなってしまったが、かつて別雷神社境内には目通り周囲4.5m、推定樹齢500年と言われていた松の巨樹があり、市内川原代方面、半田・塗戸方面からも見える高さでそびえ、その地区の人達が龍ヶ崎を訪れる際には良い目印になったと言われた。龍ヶ崎八景の1つであった「高砂の夜雨」はこの松に降る雨であるという。しかし枯れ始めたため、昭和二十八年以降に惜しまれながら伐採されている。

第1次調査で縦90cm、横60cm、厚さ7cmの「凱旋」と刻まれた戦争関連の大きな奉納額が確認されていた。表面の



凱旋の奉納額

とは歴史的な事実である。この地区に住む軍人経験をもつ飯島良二さん、金沢光男さんが取材の時にしみじみと語ってくれた「日本はもう二度と戦争をしてはだめだ！」という共通の言葉が今でも耳の奥に残っている。

風化が進み細部が判読しにくかったが第4次調査でこの額には「満州事変」（昭和六年）とこの地区の「3名の帰還兵の氏名」が刻まれていることが判明した。その中、1名はその後昭和十二年の支那事変（後に日中戦争という）により十三年に幼子を3人遺して戦死、1名は傷痍軍人として帰還、残る1名は93歳まで長生きされたことを聞いた。そして日本は昭和十六年の太平洋戦争へと突き進み、実に230万人もの軍人・軍属、80万人もの民間人の犠牲を出してしまったこと



二十三夜講、子育て観音



写真に残された松



会館内の仏像



旧市内から高砂、直鮒地区へ向かう際高砂橋を渡った最初の分岐点を左折してすぐの所にあるのが直鮒大師と呼ばれる大師堂で、付近の人達数名で清掃、献花、補修などが行われている。今回この大師堂にも立札を建て、市外の方にも地区名を知ってもらう目的で「すうぶな」のふりがなをふった。この御堂に札所塔は建っていないが平成二十六年現在、利根町布川の真言宗徳満寺を中心とする「四郡大師」という名の講が巡拝に来ており、「四郡大師」の1つの札所である。

今般龍ヶ崎西コミュニティ協議会・文化体育委員会が徳満寺住職の了解を頂いて、4月5日の足揃い（出発）から打留め（1日のゴール）まで、西コミュニティの黄色ジャンパーに取材班の腕章をつけて同行し、貴重な写真と動画を記録させて頂くことが出来た。巡拝日割り表によると龍ヶ崎中心部に入るのは例年4月5日で、関の大野大師→宮前→深堀→上大徳→戸張→医王院（砂薬師）→砂町並木、ここで北回りと南回りの二組に分かれ、南回りの最後の札所がここ直鮒大師で、その後二組は高砂会館（雷神様）で合流し御接待をうけた後、割烹かねこ裏→花光大師→新町六角堂→龍ヶ崎観音で打留めとなる。

この巡拝は江戸時代より約190年間続いており、かつては今より長い期間、親戚や知人宅に宿泊しながら徒歩で行われていたが、現在は10日間の日程で乗用車相乗りでの巡拝のため、市民が目にする機会が非常に少なくなった。

昭和三十年代頃まで南無大師遍照金剛と書かれた白装束の巡拝団が、市内札所を幟を立ててほら貝を吹きながら歩いていた光景を覚えている方も多数いると思う。新四国八十八か所霊場と呼ばれたこのような御堂が現在龍ヶ崎市内に委員会の予備調査で106基ほど確認されており、（おそらくは110～120くらいか？）なぜ88か所以上あるのか、今どうなっているか、他の御堂はどこにあるかなどについては本冊子での報告は省略する。



2014年4月5日巡拝する「四郡大師」講



14 三笠宮来龍碑



新町商店街にあった高松商店は松屋の屋号と呼ばれ、砂糖の元締めをしていた豪商であった。最近更地となり、現在大谷石の石倉と高松邸内にあった三笠宮来龍碑が残っている。

三笠宮殿下が昭和十二年（1937）21歳の時に千葉県習志野の軍事演習視察に来た際、龍ヶ崎高松邸に御仮泊（1泊）された記念として昭和十二年6月21日建立されたもので、書いた人として公爵近衛文麿の名も刻まれている。

家に入る時は近所の子供達も頼政通りから裏門に並び、国旗を持ってお迎えし、屋敷へは裏門から赤いジュウタンが敷かれていた上を歩いて入られたという。



15 竹駒稲荷神社



竹駒稲荷神社は東日本三大稲荷の一社といわれ、宮城県岩沼市にその本社がある。商売繁盛、五穀豊穡、家内安全、安産守護の神として、崇敬を集めてきた。特に東北地方において、古くは平泉藤原三代、藩政期には伊達家歴代の手厚い庇護を受けており、年間160万人の参詣者があるという。

龍ヶ崎の竹駒稲荷社は新町若生家屋敷北側にあり、同家により守護されてきた。昭和40年頃には旧暦の初午（はつうま）の日に隣り近所の信仰の篤い人達が集り、油揚げ、赤飯、五目飯、お菓子などを供え、神社の前に蓆（むしろ）を敷いて朝から大きな幟（東京、千葉の信仰者から奉納）を立て飾り物をして、一日中信仰、親睦を深める行事を行っていたが、現在は行われていない。

今回若生家にある稲荷社道具入れ箱から家紋入り提灯、和歌が書かれている銀扇子、おかめひょっとこのお面などが出てきた。時代的なものは判明しないが、かつて座興の中で使われてきた物とのことである。社わきには樹齢250年と言われている、大人三人抱えもある楠（くすのき）の御神木がそびえている。



14
15

三笠宮来龍碑・竹駒稲荷神社



16

花光大師



新町並木通り辻にある中村商店脇にあるお堂で、正面の奉納額に花光（はなみつ）大師と墨書されている。中に祀られているのは弘法大師で、右手に五鈷杵（ごこしよ：両端とも先がとがった五角形の仏具で煩惱を打ち砕く法力があるという）、左手に数珠を持つ座像である。

花光大師の由来として、創建年代は不明であるが、盲目で誕生したお光（おみつ）という名の女の子が母親によって捨てられたが、心優しいこの地域の人によって養育され成人した。この地域に沢山の花を植えてくれ、花好きの光さんと呼ばれていた。没後お光さんのお金でお堂が建てられ、子育てにご利益ありと信仰されてきた。このお堂に札所塔は建っていないがP 17 ⑬直鮒大師と同じく「四郡大師」の巡拝団が訪れ、お接待を受けているので1つの札所である。

「四国八十八か所」は、真言宗の開祖である弘法大師が平安時代、42歳の厄年のとき四国の修行地を一巡して定めたと伝えられ、所属宗派や本尊とは関係なく置かれている。巡拝した証（あかし）に大師の宝号札を納めたことから、各霊場を札所（ふだしょ）ともいう。当初は修行僧がその霊場を巡拝して苦難な修行をすることを遍路といったが、室町時代になって、亡くなった子女の供養や大師への滅罪を祈って庶民も巡拝するようになった。しかし四国は関東からあまりにも遠く多くの時間とお金と体力を要するので、各地の真言宗系の寺院や僧侶を中心に、より多くの人びとに同様な機会を与え、功德を積んでもらうおとする気運が高まり、地方に四国遍路のミニ版が開設された。

茨城県では取手市にある臨済宗長禅寺を中心とする「新四国相馬霊場」が最も古く宝永八年（1711）の開設である。他に龍ヶ崎周辺では「四郡大師」「高須大師」「谷原大師」などがある。このような新四国霊場は、江戸中期以降に北は北海道から南は宮崎県まで広範囲にわたって各地に開設されたが特に関東に集中している。茨城県内にもこれまでに約20の新四国霊場の団体（講）が確認されているが、現在も活動しているのは約5団体である。



16

花光大師



17 姫宮稲荷神社



県道千葉—龍ヶ崎線姫宮交差点近くのスーパータイヨー裏にあるのが姫宮稲荷神社である。社はないが赤い大きな鳥居と祠が4基みられる。ここ姫宮地区は戦前までわずかな畑地がある水田地帯で、人家もほとんど無かったとのことである。昭和四十七、八年頃に米町の商店主を中心に約20人の米町稲荷講とも言うべき講が結成され約20年間活動していたが、講員の減少により活動を停止し、新町稲荷講の人達に管理をお願いしたという。

当委員会で現地調査を行ったところ、境内にある祠は江戸時代中期の明和五年（1768）米町新町講中が奉納のものが2基、江戸時代後期の弘化五年（1848）のものが1基、大正元年（1912）のものが1基あった。そこで姫宮稲荷を現在お参りしている新町稲荷講（地元では単に稲荷講という）の講員に話を伺ったところ、お参りするのは姫宮稲荷、新町会館隣のお稲荷様、そして受け宿を1年交代で持回る移動できるお宮様（初午時は新町会館に安置）の3か所で、稲荷講の運営、儀式、約束事など書き付けたものを見せて頂いた。そして古い文書が会館二階にあるという。管理している区長さんの立会いのもと大型茶箱に保管されていた古文書を拝読した。



新町会館隣のお稲荷様

古文書の一部



江戸時代後期の弘化二年（1845）を筆頭に、古い方から嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶応、明治、大正、昭和、平成と11の元号の文書が沢山確認できた。内容は稲荷講員名簿（60～80名）や入用帳、掛払帳で、買った食材などの名前や費用が記されている。（ねき〈ねぎ〉、ふし〈鰯節〉、阿げ〈油揚げ〉、かづの古〈かずのこ〉、いもがら、半紙、炭、味噌、醤油、初尾〈初穂料〉、豆腐、等々）さらにこの稲荷講はお金を貸す互助会の様な役目も持っていた事がわかった。例えば建具屋喜八金三分利息六百文などと、誰がいくら借りて利息をいくら稲荷講に入金したかが記されている。



和久屋茂十郎、三浦屋善六、桶屋長兵衛、松屋茂兵衛等の屋号を付けた名前や新七、庄助等の名前を見ていると、当時この新町にいた町人、職人らの生き生きとした姿が目浮かぶようである。また、第3次調査で、今使われている明治十五年の藍染め幟の他に講員も初めて見るという寛政十年（1798）米町新町という古い幟が発見され写真に撮ることができた。

本願寺や薬師堂とともにこの姫宮稲荷も江戸期より米町、新町の人達のあつい信仰対象であったことがうかがわれた。姫宮稲荷の最も大きな祠は高さ120cmの堂々たるものである。

18 しぶくり卵塔



頼政通りに面する横町松井建材店裏側（南側）に「しぶくり卵塔」または「かげ卵塔」と呼ばれている墓地がある。古来龍ヶ崎開拓の最初の領主下河辺一族の墓跡とされているが幕末頃から大統寺より分かれ、民家の墓地となっている。一説には〈しもこうべ〉が訛って変化し〈しぶくり〉になったとも言われている。⑥で述べられている様に、頼政と下河辺氏の関係からこの2つの史跡はもっと近くにあった可能性がある。名称のとおりにかつて卵塔（卵形の仏塔）があったと推測されるが、現在一基も無い。卵塔は鎌倉時代禅僧によって中国から持ち込まれ、鎌倉中期～南北朝時代にかけて数多く作られた。敷地内には風化した六地藏が鎮座しており、読み取れる最も古い墓石は延宝五年（1678）の江戸前期である。

小道を挟んで西側に堂面墓地ともいわれる所があり、ここには卵塔が一基ある。この小道は頼政神社前小道へと続いているが、地元の方の話ではこの小道こそ古来の頼政通りと言われていたという。



19 高砂橋



栄町の最南端と高砂との境界、江川にかかる龍ヶ崎でも古い橋の一つで、昔は高砂・直舳地区の住民だけでなく利根町の住民も現在の上町周辺に集中していた各商店から農機具、金物、日常用品等を買求めるために、高砂橋を往来していた。

江川は江戸時代前期寛永年間（1624～43）には掘り切り、寛文年間（1661～72）には現在の流路に掘り割られているので、江戸時代中期には木の橋があったのであろうと想像される。これは⑫別雷神社の記述とも時代的に矛盾しない。

現在の橋は平成八年に竣工となったものであるが、栄町円城寺正夫氏の記録では以前の橋は昭和八年（1933）作製の石造欄干のものであった。当時高砂に17軒、直舳には3軒の住宅があり、栄町は昭和二十三年に1区ができたという。因みに大正時代直舳には家が無く野原であったという。

毎年開催されている八坂神社の祭礼で使用される神馬（しんめ）は江戸末期のころから宮司の依頼で高砂の農耕馬を提供していた。神馬は高砂橋の袂（たもと）で馬洗いの神事を行い、その場で子供達には赤飯が振るまわれた。尚、このような馬洗い神事は約50年位前まで行なわれたが、現在は諸事情により他の場所で行われ、馬もサラブレッド種である。



20

松濤橋



龍ヶ崎駅前交差点から水門にむかった江川に架かる最初の橋で、橋の側面に「松濤橋」の御影石製札がついている。現在のものは平成十四年に改修されたものである。

明治期に全国的に流行したという、まちの名所を〇〇八景という形で紹介する動き（今でいう市の名所案内キャッチコピー）に同調して選定された龍ヶ崎八景「①高砂の夜雨、②並木の秋月、③松濤橋の夕照、④般若院の晩鐘、⑤清（せい）堰の帰帆、⑥大座（おおざ）の落雁（空から舞い降りる水鳥の雁）、⑦愛宕山の暮雪、⑧古城（現竜ヶ崎二高）の晴嵐（晴れた日に山に架かる霞）」の1つに挙げられており並木道に樹齢300年の松が林立していた頃の松濤橋の夕景色はさぞ美しかったであろうと想像される。

又この橋の少し上流側に市内では一番大きな水門（すいもん）が昭和四十年代まであり、この水門の開閉がこの地域の水田耕作には重要な役割を果たしてきた。また地域の子供たちにとっても魚とりや遊びの場所でもあった。



21

大正橋跡地



市役所前通りから大統寺裏にかけて東西に流れる水路が西新道と交わる所、兼子医院隣にあった橋で「大正橋跡地」の石碑が昭和五十八年に建てられている。ここより西新道沿いに200m根町に向かった所に「明治橋跡地（P25）」という石碑があり西新道には明治、大正、昭和橋という三つの橋があった。

この水路も昭和三十年頃まで用水路として機能し、各水田に水を引く足踏み水車などが廻り小魚も泳ぐ牧歌的風景が見られたという。その後日本の高度経済成長と共に水路は汚れ排水路となった。

20
21

松濤橋・大正橋跡地



22

伊勢屋橋



並木通りから龍ヶ崎西小学校へ向かってすぐの所にある江川に架かる橋で「伊勢屋橋」の表示板も掲げられている。現在のものは昭和六十年に改修されたものである。

名前の伊勢屋であるが龍ヶ崎には伊勢屋を屋号とする店が多く、その多くは伊勢屋治兵衛（杉野治兵衛）家の支店やのれん分けをした店である。当主治兵衛は今の三重県鈴鹿市の出身で、江戸時代龍ヶ崎に移り油商、菓子商で財をなしたという。伊勢商人が仙台藩龍ヶ崎領へ進出し、商人として成功した先駆者的存在である。元禄年間には河内町龍ヶ崎町歩を開拓した。天明～文化年間（1781～1818）の俳諧で活躍した杉野翠兄（すいけい）は、この治兵衛家の後裔である。

伊勢屋橋は治兵衛の奥様が大病した後快癒したお礼として私財で架けたという伝承があるが定かでない。しかし治兵衛や同じく豪商であった伊勢商人油屋市平（治兵衛と姻戚関係）は飢饉などの時には大金を寄付し、飢えた者には米を与えるなど慈善事業をしたとの記録があり、この橋の恩恵を受けた地域の人々が橋の名を代々言い伝えているのはゆえ無きことではない。



23

昭和橋跡地



米町郵便局から西新道にはいった大森生花店前にあったのが昭和橋で、橋跡の存在に気付きにくい「昭和橋跡地」の石碑が昭和五十八年に建てられている。

この水路は昭和三十年頃まで用水路として機能し、下流の新町地区水田に水を引くため、春には潑浚い（みおさらい）と称して耕作者達が出動し川底の土砂を掘り上げる作業をしていたという。

西新道そのものは道路法改正により昭和十一年買収が実施され現在のように拡幅されアスファルト化されたという。

22

23

伊勢屋橋・昭和橋跡地



24

論処橋



水門変電所から前新田交差点へ向かう際に、JA龍ヶ崎の看板手前のカーブ部分に架かっている橋を「論処橋」といい、欄干右岸基礎部には御影石にひらがなで「ろんしょはし」、左岸には漢字で「論処橋」と彫ったプレートがついている。下を流れるのは三間堀または後に論所堀（又は論処堀）と呼ばれる用排水路で、約300年も前に水論（水に関する争い）のあった所である。

これは水田への用水引きのことで、水下（下流）の大徳村以下三か村（生板村、幸谷村、宮淵村）が水上（上流）の龍ヶ崎村以下二か村（馴馬村、下総国相馬郡川原代村）を訴えたもので、用水の普請工事その他の負担が等しいのに水上は存分に水引するが、水下は十分に水引できずその犠牲となり不公平であるとするもので結局幕府へ訴える事になり、それに対する裁断が下って落ち着いた一件である。これは宮城県立図書館所蔵の貞享四年（1687）4月12日文書「常州龍ヶ崎村水論始末書」に絵図入りで記され、江戸町奉行、勘定奉行なども連署名している大きな訴訟事件であった。以来水論は解決したかに見えたが、干ばつともなると殺気立ち、昭和の時代まで水上水下の水引争いは止まず、徹夜の水番で水下の百姓、水上の百姓との間の冷戦が続いてきた。

この様な争いは⑪「土地改良記念碑」のところで述べられているように大規模区画整理、灌漑用水の充実、大型揚水ポンプの導入等の近代化によって300年かかってやっと解決されたのが実態である。論処橋すぐ上流側に見える小さな水門付近に江戸時代、近郷から集まった百姓たちがいきり立って対立していたであろう光景が想像され、往時をしのぶ由緒ある橋である。

現在、論処堀は牛久沼土地改良区事務所の管理下にあり、江川川原代線から新利根川へ落ちている。今回現地調査中に左岸欄干近くで発見された「圓寂木舟不遷」安永四年(1775)と刻まれた石碑（卵塔？）については由来その他不明で、今後の調査に委ねたい。



論処橋よりJA龍ヶ崎入口看板を望む

石碑→



24

論処橋

②⑤ その他の旧跡・史跡・祠（写真資料）



延命地藏（米薬師堂）



水神宮（三笠宮来龍碑の後ろ）



国益地藏（米薬師堂裏並木）



姫宮稲荷幟（明治15年）



明治橋跡地（旧消防署近く）



新発見の寛政年間の幟



見事な堂内厨子と彫刻（米薬師堂）



十二神将の一部（米薬師堂）

26 委員会活動の様子



検討会



住職さんからの聞き取り調査



現地調査



彫り作業



墨入れ



木札設置の様子

○参考文献及び資料

- ・龍ヶ崎市史 近世調査報告書Ⅰ 龍ヶ崎市史編さん委員会
- ・龍ヶ崎市郷土史 鈴木秀雄著
- ・龍ヶ崎市史 和歌森善郎著 龍ヶ崎郷土史研究会
- ・龍ヶ崎の歴史 岡田正治編
- ・龍ヶ崎市史研究 1～10号 龍ヶ崎市教育委員会
- ・研究紀要 1～12号 龍ヶ崎市郷土史研究会
- ・図説「稲敷・北相馬の歴史」 郷土出版社
- ・図説 河内の歴史 河内町史編さん委員会 河内町
- ・稲敷大師 信仰と縁起 浅野丈二著
- ・昔、大きな松があった（企画展冊子） 龍ヶ崎市歴史民俗資料館
- ・龍ヶ崎の起こりと八坂神社 和歌森善郎著
- ・利根町徳満寺の新四国霊場「四郡大師」 近江礼子著 茨城史林第三十五号
- ・土浦市新治地区の石仏 土浦市教育委員会
- ・茨城県神社誌
- ・龍ヶ崎市史 近世編 龍ヶ崎市史編さん委員会
- ・龍ヶ崎市史 近現代編 龍ヶ崎市史編さん委員会
- ・龍ヶ崎お宝の木 お宝の木発掘委員会
- ・龍ヶ崎愛宕神社平成屋根銅板復旧記 手賀昌之著
- ・天台宗茨城教区寺史 天台宗茨城教区宗務所

○下記の方々には取材等で大変お世話になりました。厚く御礼申しあげます。（敬称略）

- ・茨城県市町村共同システム整備運営協議会事務局（地図関係）
- ・龍ヶ崎市市民協働課 ・龍ヶ崎市歴史民俗資料館
- ・寺門尚久（木札製作及び木工技術指導）
- ・土浦市文化財愛護の会 (9)
- ・般若院 (139)
- ・荒槇純隆（比叡山天台宗典編纂所） (139)
- ・大統寺 (418)
- ・八坂神社 (5)
- ・牛久沼土地改良区事務所 (11)
- ・徳満寺（利根町布川） (1316) ・青山 悌夫 (2)
- ・仏像彫刻吉原工房 (29) ・川北 一郎（下町上北自治会長） (5)
- ・海老原 章 (6) ・椎塚 栄一（米町南区長） (7817)
- ・野崎 義子 (9) ・若生 悦男（新町本町区長） (91517)
- ・菊地 勇 (10) ・塚本 政秀 (10)
- ・石塚 光男（高砂区長） (1219) ・飯島 良二 (12)
- ・海老原 悦子 (12) ・金沢 光男 (12)
- ・栗山 幸三 (12) ・師岡 文夫 (12)
- ・岩井 隆 (13) ・円城寺 正夫 (131619)
- ・佐々木アサ子 (13) ・酒井 務（直鮎区長） (13)
- ・中村 商店 (16) ・寺田 靖昭 (17)
- ・野崎 汎 (17) ・吉田 昭二郎 (17)

編集後記

アッという間の二年間でした。本冊子は、最初から作られる予定はなく、今回旧市内西部地区に立った15本の本曾檜材による立札がある史跡の由緒を調査、記録しまとめていったところ少しずつ出来上がってきたものです。龍ヶ崎西小学校管内の各町内（米町、新町、水門、姫宮、高砂、直鮒）から集まってきた我々委員の中に専門家や郷土史家は一人も居ません。

町内に一体何があるのかすら分からず皆で手分けして探すことからスタートしました。経験のない人達の集まりであることが却って、先入観なしに調査をしたり、昔の事を知っている方からの聞き取りを行えたのかもしれない。見るもの聞くもの全てが我々にとっては新鮮な発見でした。市史の様な書籍に当たれなければならない時は図書館に日参し、先輩たちが残しておいてくれた貴重な郷土史の本を何度も読み、現地に何度も足を運んでメモをとり文章を編んでいきました。慣れていないが為に何回も訂正、加筆、削除を繰り返し膨大な時間をかけてしまったページも有りますが、決して悔いてはいません。むしろ心地よい思い出となりつつあります。

一番困ったのは原稿締切期限が近づけば近づくほど、新しい発見や新たな古文書が出てきてしまって、既に文章にし、写真も組んでしまった編集ページをどう変えるかという問題でした。この様な予期しないことの連続です。その時はいつも、読んでくれる人達にとってどれが一番価値ある内容かという事を基準に決定してきました。なかには折角取材しながらページ数の関係で文字にならなかった話も沢山あります。撮影した膨大な画像データも今後何らかの形で生かしたいと思います。この地区にかつて生きていた先輩やあるいは先祖達が何を喜びとし、何を祈り、何に涙してきたかという事のほんの一端でもお伝えできたかどうか不安です。調査が始まった当初、我々の訪問目的を告げた際、市内寺院のご住職から声をかけて頂いた「それは良い御縁を得ましたね」というたった一言に支えられ、また地区内外の大変多くの方々の取材協力でやっとゴールまでたどり着けたというのが実感です。本冊子が記録として保存されるのみでなく市民の歴史探訪や町おこし、児童の教材などに利用されれば望外の喜びです。（編集部：瀧口）

協議会 会長：海老原 劭

文化体育委員：委員長	若生 悦男	副委員長	秋山 直城	副委員長	瀧口 治義
委 員	関口 圭子	小野寺 勇	添野 利勝	神長 昂	
	猪野瀬 安子	富谷 良子	寺門 芳江	薩砂 美佐保	
	岡部 久四郎	岸 祐介(サポーター)			

龍ヶ崎西コミュニティセンター

：センター長	小嶋 俊光	副センター長	塚本 賢治
大淵 葉子	片山 彩子	高山麻子	

編集：龍ヶ崎西コミュニティ協議会文化体育委員会

発行：龍ヶ崎西コミュニティ協議会

平成二十七年（2015）3月

印刷所：株式会社 イセブ



愛宕神社南側羽目板彫刻